

第34課 ショートメッセージ「みんなで賛美」

聖書箇所：ネヘミヤ12：27-43（参照12：44-47）

暗唱聖句：主はエルサレムを再建し イスラエルの追いやられた人々を集めてくださる

今回の聖書箇所は、7章1節～3節で語られた城壁の完成に続いて、城壁の奉献と式典について書かれています。エズラ記では神殿の再建について語られました。ネヘミヤ記とエズラ記は、元来一巻の書物であったものが、二巻に分けられたものであると言われています。バビロンからの帰還がいくつかのグループに分かれていて、エズラ記で書かれたグループは神殿再建を、そしてネヘミヤ記で書かれたグループは城壁の修復をしました。

時代的には、エズラ記のキュロスの勅令から、ネヘミヤ記の第二次エルサレム滞在までの約10年間の出来事を記しています。両書は内容的にも類似点が見られます。エルサレムへの帰還（エズラ記1章7節～8節、ネヘミヤ記1章～2章）、民のリスト（エズラ記2章、ネヘミヤ記7章）、再建工事（エズラ記・神殿3章～6章、ネヘミヤ記・城壁2章12節～7章3節）、妨害（エズラ記4章、ネヘミヤ記2章19節4章6章）、工事の完成（エズラ記6章13節～22節、ネヘミヤ記12章27節～43節）、祈り（エズラ記9章6節～15節、ネヘミヤ記1章5節～11節）、結婚問題（エズラ記9章、ネヘミヤ記13章23節～30節）等です。

祭司であり書記官でもあるエズラは、アルタクセルクセス王の第7年にバビロンを出発しエルサレムへと向かい（エズラ記7章7節～8節）、献酌官であるネヘミヤは、アルタクセルクセス王の第20年にエルサレムに向かいました（ネヘミヤ記2章1節）。しかし、この記述には歴史的問題として年代的不都合が生じていると言われています。ネヘミヤ記8章1節～8節では、エズラが登場し、会衆の前でモーセの律法を夜明けから正午まで読み上げたと書かれています。このことから、年代的錯誤があったとしても、同じ期間エルサレムで過ごしたことには相違ないでしょう。

キリスト教では、「歴史書」として古代ユダヤの歴史を記しているネヘミヤ記ですが、エズラ記と共に、著者は「歴代誌史家グループ」によるものであると考えられています。古代のユダヤの歴史として書かれたネヘミヤ記ですが、今この聖書のみ言葉が示されたことに、私たちは心からの感謝を主にお捧げしたいと思います。

エズラ記から続くネヘミヤ記を通して、コロナという突然の出来事によって私たちが混乱と戸惑いの中に投げ込まれ、そして少しずつ日常を取り戻しつつある中で、礼拝をお守りすることの大切さを改めて示して下さっていると思います。そして、ネヘミヤ記12章における名簿は、常盤台教会の教会員としての教会籍に記されているお一人おひとりを覚えて下さっているということであり、神さまからの祝福をいただき続けているということではないかと思えます。

27節～43節の今回の聖書箇所には、城壁の完成後の奉献式と式典がどのように行われ、どれほどの歓喜の声を民衆が神さまにお捧げしたのかが描かれています。そしてその喜びは、神さまが与えて下さった溢れんばかりの愛と祝福であることがわかります。シンバル、豎琴、琴に合わせて詠唱者たちが歌を歌い、祭司とレビ人はこの世的な性からの

清めを行い、民と城門を清めます。大きな合唱隊を編成し、一隊は城壁の上を右方向の「糞の門」に向かって進み、ラッパを持った祭司たち、ダビデの豎琴を持った者たちが、書記官エズラを前に「泉の門」からダビデの家を通り過ぎて「東の門」へと到着します。他の一隊は城壁の上を左に向かい、炉の塔から広壁、エフライムの門から古い門、「魚の門」、ハナンエルの塔、ハンメアの塔から「羊の門」まで進み、警備の門に到着します。

この情景に思いを馳せる時、皆さまはどのような映像を思い巡らしますでしょうか。

そして二隊は、神殿の中に立ちます。この時、エズラ記で記された神殿の再建に携わった人々、ネヘミヤ記で記された城壁の修復に携わった人々、かつてのイスラエルの多くの人々が、女性も子どもたちもその場に集い、神さまからの大いなる祝福を受けます。そしてエルサレムの喜びの声が遠くまで響いたと記されます。

また、もう一つの記述の、「人々は大いなるいけにえを屠り、喜び祝った。」の詳細は、エズラ記3章3節～5節、6章17節に記されています。

「この神殿の奉獻のために雄牛百頭、雄羊二百匹、子羊四百匹をささげ、また全イスラエルのために贖罪の捧げ物としてイスラエルの部族の数に従って雄山羊十二匹をささげた。」

(エズラ記6章17節)とありますが、3章3節～5節に「彼らはその地の住民に恐れを抱きながら、その昔の土台の上に祭壇を築き、その上に焼き尽くす捧げ物、朝と夕の焼き尽くす捧げ物を主にささげた。」と記されています。この、その地の住民とは、アッシリアによってエルサレム周辺に強制移住させられた外国人をさします。神殿再建の妨害をした外国人だとも言われています。

神さまからの大いなる祝福の中にあっても、いかなる時にも油断することなく、礼拝をお守りすることが重要であると教えて下さっていると思います。

私たちは今、会堂での礼拝をお守りすることが、コロナに対する緩和の中で出来るようになりました。それぞれの思いの中にある私たちではありますが、聖書で示された、礼拝をお守りすることの大切なメッセージを心に刻みたいと思います。

イスラエルの人々の、命をかけて礼拝にまで辿り着くその長い道のりを、聖書を通して私たちに語って下さっていることの意味は、神さまのご計画の中にいつもあるということ、そして、献身の思いで礼拝に臨むことの大切さを表して下さっているのではないのでしょうか。ローマの信徒への手紙12章1節～2節に「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして捧げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。」とあります。改めて、このみ言葉が示されました。

神さまは、会堂で私たちに会えることを望まれています。私たちはその思いに心からの感謝をもってお応えしたいと思います。

●分かち合い

- ・聖歌隊の賛美、会衆賛美の信仰的な意味を考えてみましょう。
- ・会堂に響き渡る会衆賛美の感動を分かち合ってみましょう。

(担当：H.I.)